

第 5 章

久留里線沿線地域の可能性 — 「ど根性栽培」による無農薬ブルーベリー観光農園事業が めざす地域活性化

齊 藤 紀 子

目 次

1. はじめに
2. 分析の枠組み, 鍵概念
3. エザワフルーツランドの取り組みにみる, ソーシャル・イノベーションの創出と普及のプロセス
 - 3-1. ソーシャル・イノベーションの創出: 地域振興への想いと「ど根性栽培」の開発, 無農薬で安全・安心なブルーベリーの摘み取り体験ができる観光型農園事業の展開
 - 3-2. ソーシャル・イノベーションの普及: 「ど根性栽培」の普及, ブルーベリー栽培関係者の意識変化, 栽培習慣の変革, 社会的評価の高まり
4. 考察

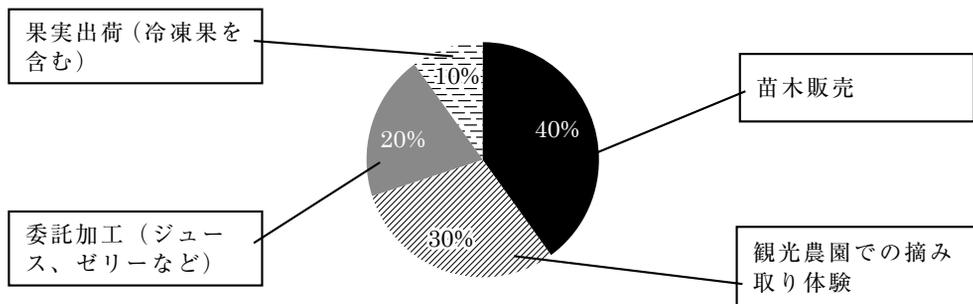
1. はじめに

観光による地域活性化をテーマとして実施した平成27・28年度千葉商科大学経済研究所研究プロジェクト「観光を通じての地域活性化—千葉県を例に」において筆者は、観光農園「エザワフルーツランド」(千葉県木更津市, 代表: 江澤貞雄)を中心として展開される無農薬ブルーベリー観光農園事業の調査・分析を行った。

表1 エザワフルーツランドの組織概要

名称	エザワフルーツランド
設立	1997年
所在地	千葉県木更津市真里谷3832番地
代表者	江澤貞雄 (木更津市観光ブルーベリー園協議会会長, 日本ブルーベリー協会副会長を兼務)
事業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・無農薬・無化学肥料によるブルーベリー栽培, 販売 ・ブルーベリーの苗木生産, 販売 ・ブルーベリーの加工食品の委託製造, 販売 ・観光農園(ブルーベリー摘み取り体験) ・他のブルーベリー生産者, 観光農園への栽培技術指導
H P	http://www.ezawaf.com

図1 エザワフルーツランドの収入の構成



(出所) 江澤 (2014) p.82およびインタビューをもとに筆者作成

ブルーベリーは、アメリカから1951年に導入されて以来、土壌改良材のピートモス¹⁾と水と化学肥料をたっぷり施して栽培することが常識とされてきた。この栽培方法により1985年、木更津市にて農協主導のもと120戸体制7haでブルーベリー栽培がスタートした

1) ミズゴケなどの植物有機物が、寒冷地の低湿地で長い年月の間堆積し、褐変腐植化したもの。軽くて通気性、吸水性に富み、鉢花の栽培用土としてそのまま、あるいは他の土と混和して用いられる。(日本造園組合連合会, <http://www.jflc.or.jp/index.php?catid=144&blogid=9&itemid=119> (2017年5月5日確認))



写真1 摘み取り最盛期のエザワフルーツランドで楽しめるブルーベリー
(出所) エザワフルーツランドホームページ (© 渡辺順司氏)

が、4 ha 以上が全滅するという失敗に見舞われた。当時、農協営農指導員として産地化を進めていた江澤は、失敗の原因を水のかけすぎによる根腐れおよび化学肥料の多用による枯死と判断した。そしてこの経験をもとに、ピートモスを使わずブルーベリーを大地に直接植え、人為的な水やりをせず、有機質肥料を年1回しか与えないという独自の新しい栽培方法「ど根性栽培」を開発するに至る。「ど根性栽培」で育てるブルーベリーは、水を求めて地中深くまで太い根を張る。根が深く広く張ると、その土地の土壌によく馴染んで乾燥に対して強くなる上、糖度も高くなる。また地上部が大きくなり、収量が増える。こうしてブルーベリー自身の強さと果実の甘さを引き出し、除草剤・殺虫剤・殺菌剤などの農薬を一切使わない無農薬・無化学肥料栽培による安全・安心な商品、ピートモスを使わず大地に直接植える省力・省資材な栽培方法で耕作放棄地でも植栽できる参入障壁の低さという社会的価値と経済的価値を生み出した。そして「ど根性栽培」を採用した地元農園や地域の関係者と協力し、助成金・補助金に頼らないビジネスとして、小さな子供からお年寄りまでが摘み取りを楽しめる観光農園産業を作り広げている。(詳細は本稿第3節を参照)

エザワフルーツランドによるこうした取り組みは、久留里線沿線地域が直面する人口減少、高齢化、地域産業の衰退などの社会的諸課題を解決しようとするソーシャルビジネスである。ソーシャルビジネスとは「社会的課題の解決に取り組むビジネス」²⁾であり、下記の通り社会性・事業性・革新性という3つの要件が求められる(経済産業省2008, p3)。

① 社会性：社会的課題に取り組むことを事業活動のミッションとすること。

2) 経済産業省ソーシャルビジネス研究会は、ソーシャルビジネスを「社会的課題を解決するために、ビジネスの手法を用いて取り組むもの」(2008, p.3)と定義している。

- ② 事業性:①のミッションをビジネスの形に表し, 継続的に事業活動を進めていくこと³⁾。
- ③ 革新性:新しい社会的商品・サービスや, それを提供するための仕組みを開発したり, 活用したりすること。また, その活動が社会に広がることを通して, 新しい社会的価値を創出すること⁴⁾。

エザワフルーツランドの取り組みにおいて, これら3要件は表2のように見出すことができる。

本稿では, エザワフルーツランドを中心とした多様なステイクホルダー間の協働によって, ブルーベリー栽培の常識を覆す「ど根性栽培」という技術と無農薬ブルーベリー観光農園事業が広がっていくプロセスを, ソーシャル・イノベーションの創出と普及の理論に基づき分析, 検討する。

以下, 第2節にて, 本事例研究の分析枠組みとするソーシャル・イノベーションの創出と普及にかかわる理論を概観する。本理論に基づき第3節では, エザワフルーツランドを中心とした無農薬ブルーベリー観光農園事業をソーシャル・イノベーションの創出期と普及期に分けて詳細にみていく。そして第4節にて久留里線沿線地域の活性化に資する, 「ど根性栽培」によるブルーベリー観光農園事業の可能性について考察する。

表2 エザワフルーツランドの取り組みにみるソーシャルビジネスの3要件

3 要件	エザワフルーツランドの取り組み
① 社会性	<ul style="list-style-type: none"> ・無農薬・無化学肥料栽培による安全・安心な商品づくり ・除草剤不使用, 刈払機での除草対応による生物多様性の保全 ・耕作放棄地の活用 ・観光摘み取り園事業を通じた観光客の誘致と地域活性化
② 事業性	<ul style="list-style-type: none"> ・省力・省資材の栽培方法による初期投資の低減, 作付面積の拡大による収穫量増 ・木更津市, 千葉県君津農業事務所, 木更津市農業協同組合, 木更津商工会議所, 富来田商工会, 木更津市観光協会, 研究者等ステイクホルダーとの協力関係構築⁵⁾によるブルーベリー観光農園産業の推進, 観光客誘致と来園者増 ・受賞等による社会的認知度上昇
④ 革新性	<ul style="list-style-type: none"> ・従来常識とされてきた栽培方法(ビートモスと水と化学肥料をたっぷり施す方法)と異なる, 新しい栽培方法「ど根性栽培」(ビートモス不使用, 人為的な水やりなし, 有機質肥料を年1回のみ)の開発・実施 ・ブルーベリー栽培関係者の意識変化, 「ど根性栽培」を採用する農家の増加⁶⁾, 栽培習慣の変革 ・無農薬ブルーベリー観光農園事業の拡大

3) ソーシャルビジネスの目的は利潤の最大化ではなく, 事業活動を通して新しい社会的価値を創出し, 事業を継続することにある。ソーシャルビジネスは, 経済的成果と社会的成果の双方の達成が求められる。(谷本2015, p5)

4) 社会性と事業性は容易に結びつくわけではなく, それを繋げていくには, 何らかのイノベーションが必要となる。(谷本2015, p5)

5) 江澤はこれら協力組織のことを「日本一の応援団」と呼んでいる。

6) 「ど根性栽培」を採用した農家数を示す統計資料はないが, 江澤への講演依頼や栽培指導の依頼の増加, 全国各地で栽培指導を行った件数から推測される。

2. 分析の枠組み、鍵概念

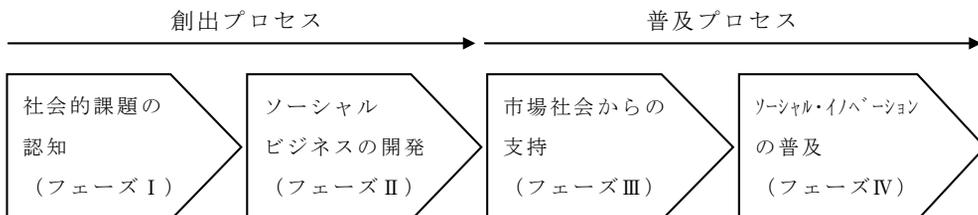
ソーシャル・イノベーションの「創出」と「普及」のプロセスにかかわる理論をもとに、本事例の分析を行う。ここでは、ソーシャル・イノベーションが鍵概念となる。

ソーシャル・イノベーションとは「社会的課題の解決に取り組むビジネスを通して、新しい社会的価値を創出し、経済的・社会的成果をもたらす革新」(谷本・大室・大平・土肥・古村2013, p8)と定義され、4つのポイントがあるとされる。

第1に、少子高齢化、コミュニティの衰退、環境問題、格差・貧困など、社会的課題の解決を目指したものであること。第2に、こうした社会的課題の解決にビジネスの手法を用いていること。第3に、経済的成果と社会的成果の両方が求められること。第4に、経済的・社会的成果の達成にとどまらず、新しい社会的価値を生み出し、既存の諸制度を変革していくこと。(谷本・大室・大平・土肥・古村2013, pp.8-9)

イノベーションという用語は、新技術・新素材などの開発にかかる科学技術上のテーマだけでなく、新商品、新生産方法、新市場、新組織形態、さらには新しいビジネスの仕組みや新しい社会制度の構築／再編成にまで適用されるようになっていく。野中・廣瀬・平田(2014)は多様な知識を活用し既存の物事から新しい仕組みを創造すること、さまざまな仕組みや関係の革新が生み出されることもイノベーションであると論じている。こうした中、谷本(2013)は近年イノベーションの概念が進化していること、地域づくり、福祉、健康、金融、ICTなど広い領域で新しい仕組みや制度の構築／再編成が進められており、ソーシャル・イノベーションが重要な課題となっていることを指摘している。「ソーシャル・イノベーションには、ビジネスのイノベーション研究の枠内に収まらない現象が見られる」(谷本・大室・大平・土肥・古村2013, p.10)といい、ソーシャル・イノベーションに関する先行研究として政治・福祉制度改革を論じるもの、ソーシャルビジネスによるもの、市民社会運動による社会変革を論じるものまで検討している。本稿では上記の定義

図2 ソーシャル・イノベーションのプロセス



(出所) 谷本・大室・大平・土肥・古村 (2013) p.19

に基づき、ソーシャル・イノベーションを「ソーシャルビジネスにより社会的課題を解決して新しい社会的価値を創出し、経済的・社会的成果をもたらしつつ、既存の諸制度を変革していくこと」と捉える。

谷本・大室・大平・土肥・古村（2013）によれば、ソーシャル・イノベーションには社会的課題の認知（フェーズⅠ）、ソーシャルビジネスの開発（フェーズⅡ）、市場社会からの支持（フェーズⅢ）、ソーシャル・イノベーションの普及（フェーズⅣ）という段階があり、これらの段階を行きつ戻りつしながら進んでいく（図2）。

ソーシャル・イノベーションの創出から普及に至る一連のプロセスをみていくことで、ステイクホルダーからの支持を得てさまざまな資源を獲得し新しいビジネスモデルを生み出していくこと、ビジネスを通して人々の理解・意識変化を促すこと、ステイクホルダーにうまれた変化が社会変革に結びついていくことを理解することができる指摘している。そこで次節では、エザワフルーツランドのソーシャル・イノベーションの創出と普及のプロセスをステイクホルダーとの関係に注目しながら詳しくみていく。

3. エザワフルーツランドの取り組みにみる、ソーシャル・イノベーションの創出と普及のプロセス

表3 エザワフルーツランドの取り組み内容（略年表）

	時 期	出 来 事	備 考
準 備 期	1983年	江澤が農協営農指導員として勤務する中、故・佐藤宗治郎（元・富来田町長、富来田農協組合長）よりブルーベリーを紹介され、試験栽培を始める。	
	1984年	江澤が書籍『房総半島午前四時』に論説「農業の変化と対応」を寄稿。東京湾アクアライン建設にともなう房総半島のこれからの農業のあり方について主張。	
	1985年	農協によるブルーベリー（ハイブッシュ種）の産地化の取り組みがスタート。従来型の栽培方法により120人体制、7haで実施。しかし4ha以上で失敗。	
	1989年	千葉県農業大学校に導入されたブルーベリーを視察、無農薬栽培法の研究スタート。	1990年代にはマスメディアで「目に良いブルーベリー」と評判が高まり、全国に産地が拡大する。
	1994年8月	日本ブルーベリー協会が発足。江澤も入会、創設時より理事に就任。	
創 業 期	1997年10月	江澤が、ブルーベリーによる地域振興を志し農協を退職。専業農家としてブルーベリー栽培を行うべく、エザワフルーツランド設立。幸子夫人と2人で開墾作業からスタート。	アクアライン開通。
	1998年	開墾を進めた竹山にブルーベリーを植えて枯れなかったことから、「ど根性栽培」の有効性を確信。	

久留里線沿線地域の可能性

事業 開 発 期	2002年	全国でも珍しい森林体験型の観光農園としてエザワフルーツランドオープン。(1ha, ブルーベリー約1,500本。1000円で時間無制限の食べ放題。)		
	2005年10月	江澤が日本ブルーベリー協会の副会長に就任。		
	2007年10月	木更津市観光ブルーベリー園協議会設立。(設立時の参加農園数は6園, 設立時から多様なステイクホルダーによる「日本一の応援団」を形成)		
発 展 期	2010年	9月	江澤が日本ブルーベリー協会のブルーベリー栽培士に認定される。	
		10月	江澤が千葉県知事より「エコファーマー」に認定される。	
	2012年5月	松木(木更津市)が全国市町村研修財団市町村職員中央研修所による「市町村アカデミー」修了レポートとして、ブルーベリー観光農園のPR戦略を策定。		
	2013年2月	江澤が日本特産農産物協会主催「地域特産物マイスター制度」において全国で2番目のブルーベリーマイスターに認定される。	評価ポイント：ブルーベリー栽培の新技術	
普 及 期	2014年10月	江澤が国土緑化推進機構主催「平成26年度全国育樹活動コンクール」林野庁長官賞を受賞。	評価ポイント：山の斜面活用, 省資材・省力の栽培法	
		江澤の単著『ブルーベリーをつくりこなす：高精度, 大粒多収』出版		
	2015年	2月	江澤が農林水産省主催「平成26年度環境保全型農業推進コンクール」関東農政局長賞を受賞。	評価ポイント：無農薬・無化学肥料による栽培技術の確立・普及, 山林の有効活用, 生物多様性保全の取り組み
		10月	江澤が国土緑化推進機構主催「平成27年度森の名手・名人」に選定される。	評価ポイント：4部門(森づくり, 森の恵み, 加工, 森の伝承・文化)のうち森づくりの優れた技
		11月	木更津市観光ブルーベリー園協議会が千葉県主催「ちばコロボ大賞(千葉県知事賞)」を受賞	評価ポイント：環境に配慮したブルーベリー栽培による地域活性化
		12月	木更津市のブルーベリーの更なる認知度向上とJR久留里線の活性化を目的として, 木更津市観光ブルーベリー園協議会主催で「ブルーベリー紅葉祭り」を開催。	JRとの連携イベント第1弾。
	2016年	3月	木更津市観光ブルーベリー園協議会が, ブルーベリー観光農園のさらなるブランド化を目指して, オリジナルロゴを作成。	千葉県産業振興課の専門家支援メニューを活用。
		7 - 9月	木更津市のブルーベリーの更なる認知度向上とJR久留里線の活性化を目的として, 木更津市観光ブルーベリー園協議会主催で「ブルーベリー摘み」を開催。	JRとの連携イベント第2弾(これは継続プロジェクトになっている)。
		11月	木更津市観光ブルーベリー園協議会が, 農林水産省・日本農林漁業振興会共催「豊かなむらづくり表彰事業」で農林水産大臣賞を受賞。	評価ポイント：ブルーベリー観光農園事業の推進や地域団体との連携による事業推進
	2017年	11月	木更津市観光ブルーベリー園協議会が, 農林水産省主催「ディスプレイ農山漁村の宝」(第4回選定)に選定される。	評価ポイント：農山漁村活性化の優良事例

(出所) 筆者作成

3-1. ソーシャル・イノベーションの創出：地域振興への想いと「ど根性栽培」の開発、 無農薬で安全・安心なブルーベリーの摘み取り体験ができる観光型農園事業の展 開

(1) 江澤の地元地域の農業への想いと「ど根性栽培」の開発

江澤は1947年木更津生まれで、いま活動拠点とする木更津が地元であるが、ずっと地元で農業に従事してきたわけではない。父親が営んでいた林業が産業構造の変化に伴い衰退していく様を見て育った江澤は、かつて農業とは異なる職に就いている。父親が所有していた山林は薪や木炭生産のための里山であったが、戦後、化石燃料が主流となり薪や木炭の生産は廃れていった。山からの収入が期待できなくなる中、近隣農家は京葉工業地帯に働きに出るようになっていった。地元地域のそうした変化を見ていた江澤は農業に関心をもち、東京のデザイン専門学校を卒業後に広告代理店に就職したのであった。転機が訪れたのは、1974年、江澤が27歳のときである。実家を継ぐことになり木更津に戻ってきた。それからは高齢化と後継者不足が深刻化していく地元地域の産業振興について強い問題意識を持ち、のちにブルーベリー観光農園につながるさまざまな行動を起こしていつている。

木更津に戻った後には富来田農協（現・木更津市農協）に就職し、営農指導員としてこの地域にない新しい作物の導入に注力するようになった。競争力のある作物の導入に積極的だった江澤は、故・佐藤宗治郎（元・富来田町長、富来田農協組合長）と出会い、高齢農業者にとって栽培にかかる負担が少ないというブルーベリーの可能性について聞き、関心をもつようになる。1983年、江澤は自らブルーベリー栽培に取り組みはじめた。

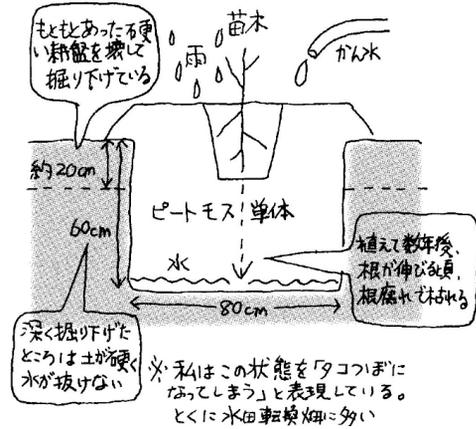
この頃木更津地域では、東京湾を横断して川崎と木更津を結ぶ東京湾アクアラインが地域にどのような影響や効果をもたらすか議論が交わされていた⁷⁾。江澤は書籍『房総半島午前四時』に寄稿した論説「農業の変化と対応」の中で、地力豊かな農業用地を持ちながら低所得に甘んじている現農業から企業並み所得の望める近代都市農業に転換すること、都市内にて人間らしく生きるために農業は憩いの場や農産物ショッピングセンター、生ごみ処理工場、農産物供給地など住みよい生活環境づくりの役割を果たすことが必要だと主張している（江澤1984）。

1985年には全国に先駆けて産地化することを目指して、栽培は難しいもののおいしいと評判の「ハイブッシュ」という品種のブルーベリー栽培が佐藤のリーダーシップのもと

7) 東京湾アクアライン建設については1966年より調査が開始され、1989年着工、1997年に完成した。

120戸体制7haでスタートした。ブルーベリーは1951年にアメリカから導入されて以来、ピートモスと水と化学肥料をたっぷり施す栽培方法が推進されてきた。このときも栽培指導にあたった研究者や農業試験場から「ブルーベリーは水を好む」という助言がなされたため、畑に井戸を掘って熱心に水やりを行った農家あり、水に無縁な畑に植えたものの株元や畑全体にワラなどを敷いて極力乾燥を防いだ農家あり、と可能な限り水分を多く確保

図3 植え穴に水がたまるしくみ



(出所) 江澤(2014) p.15

する対策がとられた。ところが1～2年後、定植した7haのうち4ha以上が全滅してしまったのである。

ここで失敗の原因について検討し、仮説をたて、それを検証してみたことが、のちの「ど根性栽培」の開発につながっていく。江澤は枯死した株と生き残った株を比較してみた。水やりができず株元にモミ殻やワラを敷き乾燥を防いだ株は生き残り、熱心に水やりをした株は枯死していたという。また熱心な農家ほど早く育てるために化学肥料を多用しており、こうした農園で枯死に見舞われていたという。これらのことから江澤は、枯死の原因を水のやりすぎによる根腐れと化学肥料の多用と考え、まず過乾燥・過湿を引き起こすピートモスの大量使用に疑問をもつようになっていった。

苗木の定植時は、苗木1本につき深さ60cm、幅80cmの大きな植穴を掘り大量のピートモスを投入していた。ピートモスは保水性と通気性に富み酸性土壌をつくるためブルーベリー栽培に適しているとされるが、1か月程度雨が降らない状況が続くと乾燥して水をはじく撥水性をもち、水を吸わなくなるという(過乾燥)。そうならないように水やりが必要になるが、そこへ雨が降ると植穴に水が溜まってしまい、根が伸びる頃に根腐れを起こしてしまうのである(過湿)(図3参照)。

ハイブッシュの場合、10aあたり200本以上の苗木を定植するという。その分手間もコストもかかる大量のピートモスが根腐れを引き起こしているとなれば、これを使わずに植える別の方法が必要になる。併せて別の品種を検討することも必要になるが、江澤は「ブルーベリーと言えばハイブッシュ」「ラビットアイという品種はおいしくない」という既成概念をもっていたという。そのような中、偶然の出来事から新たな気づきを得たことを次のように述べている。

当地区は梨の幸水を全国に先駆けて出したところなんですよ。だからおいしくなくてはいけないので、やっぱりハイブッシュ一本でいきましょうという話もしたんですけど、ある年の8月にたまたまラビットアイを食べたら、柔らかくて甘くておいしいわけ。これは、収穫時期を知らなかったんだなと思ったわけよ。ハイブッシュとラビットアイは私、違うのではないかと思ったの。日本では、いまはラビットアイもだいぶ増えてきたけど、昔はブルーベリーと言えは植える人はハイブッシュしかなかったもの。

1987年からブルーベリーの流通技術の研究にかかわり江澤とともに千葉県産ブルーベリーの産地化に尽力した、千葉県君津農業事務所主任上席普及指導員の本居聡子は、ハイブッシュとラビットアイの特性の違いを「一般の人からすると日本梨と西洋梨ほど違う」と表現している。そして江澤がハイブッシュとラビットアイの違いに気づきラビットアイに着目したことは、ハイブッシュでは実現しないさまざまな取り組みが可能になる“大きな転換点”であったと指摘している。しかしながら当時の千葉県産ブルーベリーの優位性、農業政策、そして害虫の出現は、営農指導員として品種切り替えや農薬も使わない新しい栽培方法について農家の理解を得ようとする江澤に多くの試練を課したという。

ブルーベリーは寒冷地を中心に栽培が行われており、暖かい千葉県は栽培の南限とされた。千葉県でとくに発展したハウス栽培の技術により日本で一番早く5月上旬には収穫し出荷できたため、「初ガツオ」効果で小さなパック1つあたり500円という高い値がついたこともあったという。これが千葉県産ブルーベリーの競争優位と位置付けられたことが、早生の品種への強いこだわりをうむこととなり、甘み・おいしさの観点による品種切り替えを妨げることになった。そして同じ頃、米の生産調整のため米から他の作物への転作が奨励されており、木更津では水田をブルーベリー用の圃場にする農家が増えていた。湿気が多く十分に根が張れていない木から実を取り、木を疲れさせてしまった結果、多くのブルーベリーの木の劣化・枯死を招いてしまった。さらには木についている実に卵を産みつけるオウトウショウジョウバエが発生し、市場に出荷したブルーベリーの実の中から虫がでてくる事態により出荷停止を余儀なくされたのである。

品種切り替えもできず、木の枯死の原因も明らかでないまま、ブルーベリーの収益性は低いと受け止められ農家は不満を抱えていった。そのような中、江澤はさまざまな品種を試作し、ラビットアイを「ど根性栽培」で育てることによる新たな可能性を切り拓いたのである。

江澤は、ハイブッシュとラビットアイの苗木生産を行う中で、ラビットアイがハイブッシュと比べて樹勢が極めて強く、成長も早いことに気づいて驚いたという。ある時水やりが3日おきになり、ときには1週間程度もできないことがあり、枯れてしまったように見えたが、ひとたび水をやれば驚異的に復活し丈夫な苗木になったという。そしてラビットアイに適した土壤酸性度が、山に直接定植することが可能なレベルであることに着目した。畑など農地に定植する場合にも酸性度を高めるためにお椀いっぱい硫黄粉を使用すれば十分であった。山や畑に直接定植することはすなわちピートモスを使わないことであり、作業の大幅省力化・大幅コストダウンにつながった。定植後は株元に乾燥を防ぐ有機物マルチ⁸⁾を厚さ10cm程度施すのみで、人為的な水やりを一切せず水ストレスを与えたところ、ブルーベリーが水を求めて地中深くまで根を張り、丈夫な木に育った。肥料は一株当たりお椀いっぱいの有機質肥料(菜種油かす)を年1回施すのみで化学肥料は与えずに済んだ。

江澤はこうした自らの栽培体験を通じて、ブルーベリーは水を好むのではなく乾燥を嫌



写真2 苗木(ラビットアイ)



写真3 植え付け後硫黄粉をかけたところ



写真4 乾燥を防ぐため有機物マルチを施すところ

8) 竹チップなどで株元を覆うこと。

9) 江澤が「ど根性栽培」の有効性を確信したのは、自らの山に苗木を定植して枯れないことを確認した1998年のことであったという。その後も試行錯誤し研究を続け、(株)サカタのタネ発行の月刊紙『園芸通信』にブルーベリー栽培方法の記事を連載することを通して「ど根性栽培」についてとりまとめ(2002年)、内容の修正を加えながら書籍『ブルーベリーを作りこなす』の出版にまで発展させている。

うこと、停滞水に弱く水はけのよさを求めること、株元さえ乾燥させなければなかなか枯れない強い作物であること、なかでもラビットアイは強くて育てやすく収穫時期を正しく知れば美味しい実が収穫できることを知ったのである。この知見をもとに、ピートモスと灌水と化学肥料で人工的に育てるのではなく、なるべくその土地の土に根を張らせ、ブルーベリー自身の力で育てる栽培法「ど根性栽培」を確立していった⁹⁾。これがどれほど新しく画期的な栽培方法であったのか、日本ブルーベリー協会会長の石川駿二は次のように語っている。

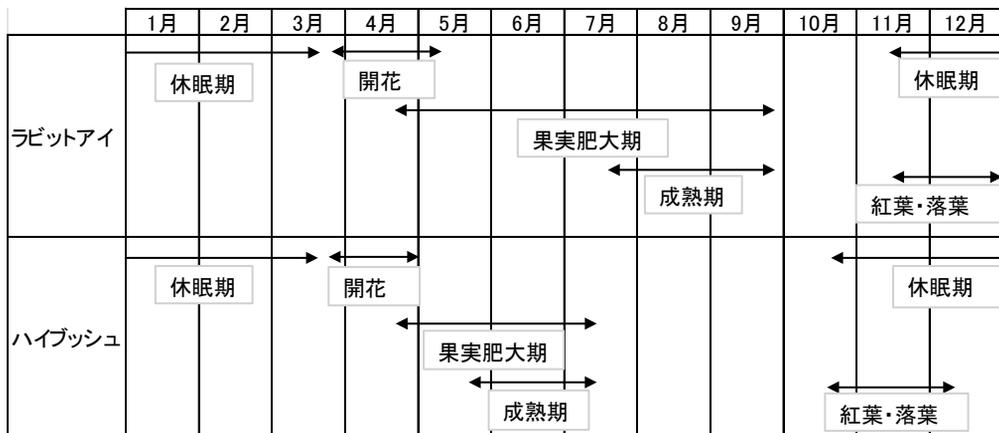
江澤さんが提案するような強烈なものは、江澤さんが初めてでした。それまでは基本的にはほとんどこれ [筆者注：日本ブルーベリー協会が従来の栽培方法についてまとめ出版した『ブルーベリー全書』] だったんです。

ブルーベリー協会が設立された当時 [筆者注：1994年] から、江澤さんは自分でこつこつやってきたんです。基本的には『ブルーベリー全書』から始めて、江澤さんが思うやり方をずっとやっていて、それでその間、江澤さんは言う人じゃないけど、じつと我慢して自分の技術などを磨いていた。

(2) 観光農園エザワフルーツランドの開園

1997年には東京湾アクアラインが開通した。その後、市内買い物客の都心等への流出と木更津駅前の商業施設の閉店、中心市街地の空洞化が見られるようになっていく。『房総半島午前四時』（1984年）への論説投稿以前からアクアライン開通後の変化と対応につい

図4 ラビットアイとハイブッシュの生育期間の比較



(出所) 江澤 (2014) pp.60~61をもとに筆者作成

て思いを巡らせていた江澤は、海・山・川のすべてが揃う恵まれた自然条件と都心へ1時間程度というアクセスの良さに恵まれた木更津市の魅力を最大限活かして、ブルーベリーの摘み取りができる観光農園をつくる構想を温めていた。

江澤が「ど根性栽培」で育てるラビットアイは、7月下旬～9月に収穫期を迎える。学校の夏休み期間にあたるこの時期は、家族で足を運んでもらうのにタイミングが良い。ハイブッシュの2倍以上ともなる多収量で収穫が追いつかないほどであり、来園者には時間制限なしに存分に食してもらえる。木についている期間が長いので、長期間太陽の光を受け栄養分を蓄え抗酸化作用も高いことをPRでき、樹上で甘くやわらかくなった完熟果は市場流通よりは摘み取って食べるのに適している。

アクアライン開通と同じ1997年、江澤はブルーベリー観光農園による地域振興を決意して50歳で農協を退職し、ブルーベリー専門農家としてエザワフルーツランドを設立した。そして所有する里山斜面の竹林や杉林を幸子夫人と2人で開墾する作業をはじめた。このときの江澤の想いが『農業経営者』2010年9月号の記事の中で次のように語られている。

家族は渋々認めてくれたけど、本格的にブルーベリーの産地にしていくためには、周囲の農家に認めてもらわなければだめなんです。自らリスクを冒して実績を出さなければ、人はついてこないと身に沁みた23年間でしたからね。

「自分が成功することによって真似をする人が出てくる」との信念のもと、観光農園として魅力ある場にするため様々な配慮・工夫を行った。来園者は摘み取った果実をそのま



写真5 休憩所



写真6 ビオトープと子供たち

10) たとえば収穫期に大きな問題になるスズメバチについても、春に梅酢・ブドウ酢・リンゴ酢を入れたペットボトルを園内の木にぶら下げ、女王蜂を駆除できれば解決できるという。

ま食べるため、完全無農薬・無化学肥料栽培による安全・安心な商品づくりを徹底した。除草剤も使わず刈払機で除草作業を行い、生物多様性の保全にも努めた¹⁰⁾。摘み取り園までの山中には散策道を整備し、道中に水車を設置した。園内にはジャムを手作りできる小屋、小舟に水を張って作ったピオトープ、イベントスペースとなるステージ、その前には客席にも休憩所にもなる100人程度が座れるベンチをもうけた。

こうして開墾を進めた園内で、設立の翌年1998年に「ど根性栽培」で育てた苗木が枯れないことを確認し、2002年には全国でも珍しい森林体験型のブルーベリー観光農園として、1,000円で時間無制限食べ放題のエザワフルーツランドを開園した。

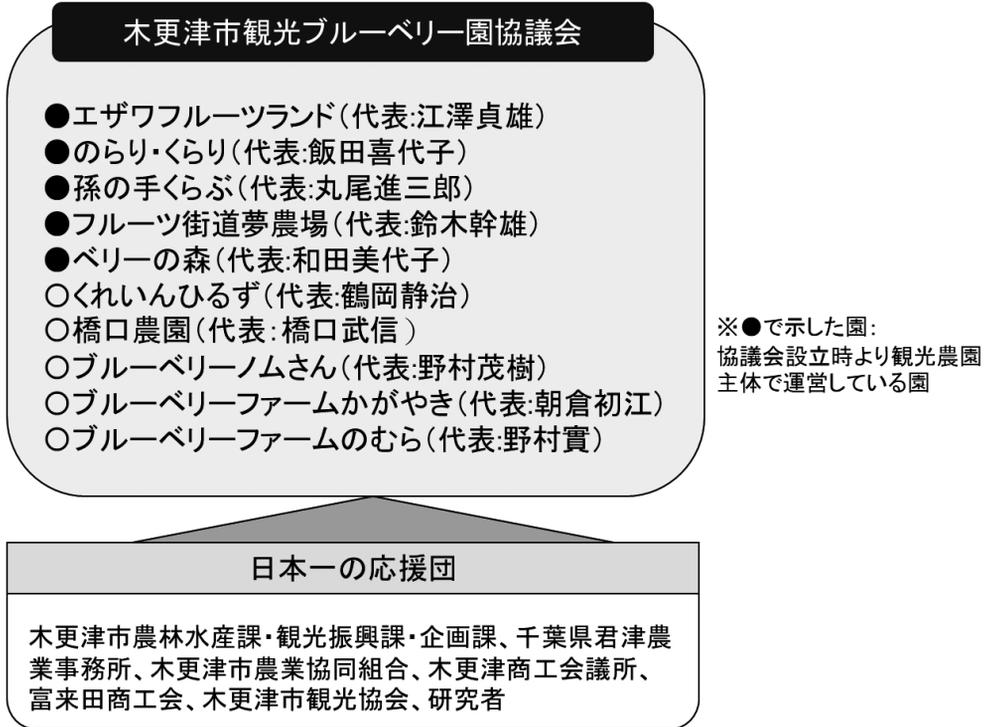
(3) 木更津市観光ブルーベリー園協議会の立ち上げと日本一の応援団

エザワフルーツランド開園後、「ブドウといえば勝沼、ブルーベリーといえば木更津」と言ってもらえることを目指して地域全体が協力し観光農園の振興を図るべきとの信念をもち、江澤は仲間づくりを積極的に進めていった。このような考え方に共感してブルーベリー観光農園をはじめた「ブルーベリー園のらり・くらり（代表：飯田喜代子）」、「孫の手くらぶブルーベリー園（代表：丸尾進三郎）」、「フルーツ街道夢農場（代表：鈴木幹雄）」、「ベリーの森（代表：和田美代子）」ほかの全6園で、2007年、「木更津市観光ブルーベリー園協議会」（以下、協議会）を立ち上げた。立ち上げにあたり、行政や関連団体、研究者など重要なステイクホルダーからの支援を得やすくするため、戦略的に組織名に「木更津市」「観光」という単語を入れたという。そして支援といっても補助金・助成金などの資金支援を意味していないこと、自立経営していくためのビジネスモデルづくりに必要な支援を求めていることを説明して働きかけを行ったという。このあたりのことについて、江澤は次のように語っている。

行政には知識や情報を出してくれとお願いしたの。協議会には設立時の農家6軒のほか、木更津市農林水産課・観光振興課・企画課、千葉県君津農業事務所、木更津市農業協同組合、木更津商工会議所、富来田商工会、木更津市観光協会、研究者などの「日本一の応援団」がついているの。この応援団には、必要な部署すべてに案内を送りました。

[中略]補助金ありきでは絶対駄目。だから木更津市観光ブルーベリー園協議会も、組織したときには6人だけど、初めから毎年のように、集まる度に会議冒頭「私たちは補助金をいただきません、みんな自分たちでやるんですよ」と。そう言わなければね、市役所だって会議に出てこないですよ。「金くれ」「何か事業ないか」とばかり言っ

図5 木更津市観光ブルーベリー園協議会の構成農園（2017年現在）



(出所) 筆者作成

ていたら、「あそこは会議に出るとまた言われるから」と誰も出てくれないよ。それを知っているから、私たちは「補助事業や補助金はあてにしません」と。自分たちでやっていたら必ず、逆にこの事業を使ってくださいとなるわけです。

協議会設立から10年経った2017年現在、構成メンバーは10園にまで増えている。そこには、地域から人口が減っていく現状に全メンバーが危機感を持ち「どうにかしたい」と強く思っていること、異業種（福祉事業者、建材業者、元・市役所職員、元・議員、元・教員など）からの新規参入者が多く、「ど根性栽培」の採用に抵抗がなかったこと、観光農園での摘み取りだけでなく生果・冷凍果の出荷、ジャムやマフィン、飲料、ゼリー等加工品の委託製造・販売といった6次産業化により地域活性化を図るというソーシャルビジネスの取り組みを進めてきたこと、そうした取り組みを上記「日本一の応援団」の支援を受けながら対外的に発信してきたこと、が要因となっていると考えられる。

木更津市役所職員として協議会をサポートしてきた松木貴史は、新たなことを始めていく上で異業種からの参入者が既成概念に捉われていなかったことは大きな要因であったこ

とを指摘している。

従来のやり方でブルーベリーを作っていた人たちには、江澤さんの栽培法はなかなか入ってこない気がします。協議会メンバーの多くはもともと農家ではなくて他の仕事をしてきたから、おそらくブルーベリーどころか農業そのものに対する固定観念がなかったのでしょうか。だからこそ江澤さんのやり方をすんなり受け入れられたのかもしれないですね。

江澤が積極的に苗木の提供、栽培指導、園のプロデュースなど開園に向けたサポートを行い、協議会メンバーはみな、「ど根性栽培」によりラビットアイの栽培を実施している。江澤は次のように語っている。

「よければ真似して」という想いでやっているの。情報を明らかにすれば人はついてくる。自ら「やりたい」という人を待っているの。やりたい人は研修生として受け入れています。1～2年。本に書かれている以上のノウハウを教えます。苗木のさし方、種のまき方など、何から何まで指導しています。

補助金・助成金に頼らずビジネス展開し自立経営していくこと、観光拠点として相乗効果で人を呼び込むためには特定の園だけが儲かるのではなく、メンバー皆が儲けられる仕組みづくりを行うことが必要である—この考え方は協議会立ち上げ時から明確に掲げられ、メンバー間で共有されていた。江澤は次のように語っている。

地域で継続するにはボランティアではダメなんですよ。実利が必要。最初から補助金を入れないで、自ら一生懸命やっていくことを目的としてスタートしました。例えば会員の中に看板作りが上手な人がいるの。看板を作ってくれたら代金を支払ってる。継続性を考えるとね。ボランティアは非常に、聞こえはいいかもしれない。でも長続

-
- 11) 協議会設立時からのメンバーで、NPO 法人として農・福連携による知的障害者の就労支援を行い、1人あたり3万円以上の工賃支払いを達成しているNPO 法人一粒舎／ブルーベリー摘み取り園のらり・くらし代表の飯田は、次のように述べている「本当にブルーベリーにもものすごく感謝しています。おかげで3万円を超える工賃がいま払える作業所になった。3万円は障害者年金と合わせると約10万円になる。10万円ないと親元から離れて自立できないじゃないですか。だからなんとしても3万円払いたかった」。

きをさせようという、やっぱり手間賃ぐらいいは出すとか、そうしないと無理じゃないかな。[中略]仲間を作らないと。一人ではダメ。メンバーのためになることをしないと¹¹⁾。協力することが自分のためにもなる。よその園も自分の園だと思ってやらないと。嘘をつかないでね、人とのコミュニケーションを大切にね。

こうした協議会の取り組みに対して「日本一の応援団」はそれぞれに支援を行ってきた。千葉県君津農業事務所はエコファーマー等各種申請文書の作成支援、木更津市農業協同組合は収穫祭への参加機会提供、富来田商工会は補助金申請に関する情報提供、木更津市観光協会は写真コンクールへの協賛、木更津市はメディア向けプレスリリースの発信や各イベントの応援など。中でも、協議会メンバーはとくに木更津市職員の松木に感謝しているという。松木は江澤の考え方に強く共感し、対外的な情報発信において大きな役割を果たしてきた。松木は次のように語っている。

前例のないことも含めて様々なことをやってこられたのは、江澤さんが一生懸命やってきたのが伝わったからです。そうでなければ絶対あそこまではやれなかったはずですよ。どうせやるなら1番になろうという気持ちがあったからこそ、たとえ周りを敵にまわしても自分のやりたいことを貫こうとする江澤さんに共感したんです。

それを表す一例として、イベントの集客力を向上させるために20～30歳代の女性をターゲットとしたチラシがある(図6参照)。イベントタイトルや日時など、目につく文字はすべてドット(点)でデザインするなど「垢ぬけたデザイン」を目指したという。こうした

図6 松木が作成したチラシ



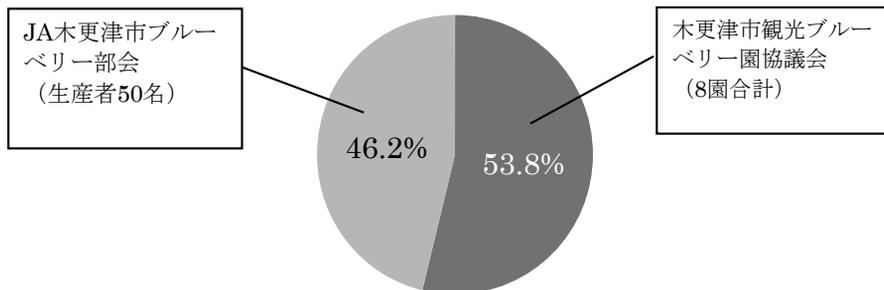
(出所) 木更津市ホームページ

12) エザワフルーツランドのパンフレット作成においては、観光まちづくりコンサルタント今村まゆみ氏の協力を得ている。

PRの仕方や、「農業と林業のコラボレーション」というキャッチフレーズづくり、外部のクリエイター¹²⁾との連携、加工品のパッケージデザインにおいて優れた事例の研究、協議会ホームページの立ち上げ支援、プレスリリース作成・配信など、クリエイティブな視点やアイデアを提案するプロデューサーを務めてきた。そしてその取り組みがまた新たな支援を呼び込むようになったと指摘している。

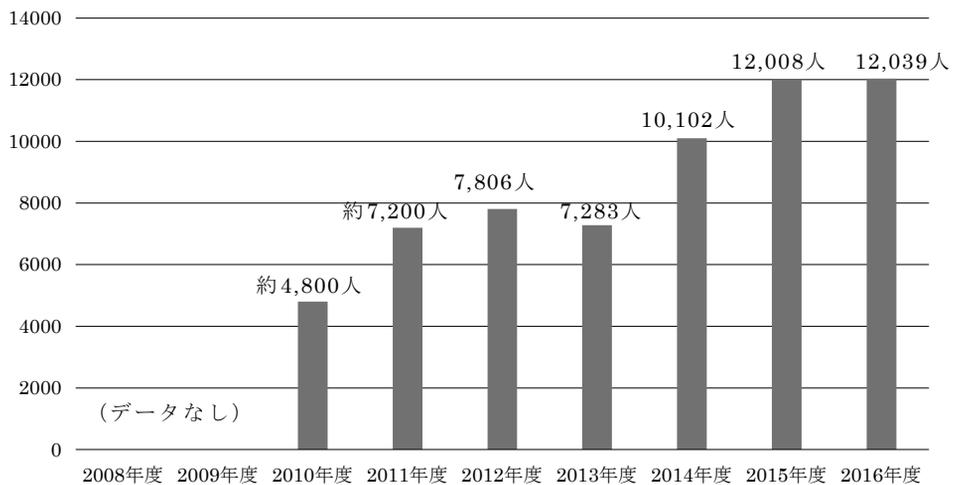
江澤さんがもともと多くのことをやってきたという基礎がまずあって、それに共鳴して自分が新しいことを始めたところ、いろいろな人たちがうまいこと入ってきたんです。

図7 木更津市全体でのブルーベリー栽培面積のシェア（2015年度）



(出所) 木更津市観光ブルーベリー園協議会「平成27年度ちばコラボ大賞」応募資料をもとに筆者作成

図8 木更津市観光ブルーベリー園協議会の観光入込客数の推移



(出所) 筆者作成

こうした取り組みが実を結び、協議会によるブルーベリー栽培面積の増加、観光農園への観光客誘致成功、来客数増加という社会的・経済的成果を生み出している(図7, 8参照)。

農協などの市場出荷価格が1kgあたり1,000円程度であるのに対して、徹底した農薬・化学肥料不使用により、観光ブルーベリー園協議会の生果販売価格は1kgあたり3,000～4,000円、冷凍果販売価格も2,000円を下回ることはないという。「ど根性栽培」による安全・安心な商品という品質がビジネスとしての競争力も備えてきたといえよう。江澤は日本農業新聞2016年9月26日の記事の中で「仲間が結束することで、観光客のさまざまなニーズに応えられる。日本一の応援団がついているのが強みだ。一人では決してできなかった。」と述べている。

3-2. ソーシャル・イノベーションの普及：「ど根性栽培」の普及、ブルーベリー栽培関係者の意識変化、栽培習慣の変革、社会的評価の高まり

(1) 「ど根性栽培」の普及とブルーベリー栽培関係者の意識変化

江澤は協議会の新規参入者に対し苗木販売や「ど根性栽培」の技術指導を行うだけでなく、協議会にとどまらず全国および海外にまで活動の場を広げている。「ど根性栽培」の普及と、より多くの農園の利益を創出することを目的として、苗木販売・購入者への定期的な栽培指導¹³⁾、品種構成のアドバイス¹⁴⁾、国内や海外からの視察の対応、インターンの受け入れ、寄稿や書籍の出版などを行っている。

2010年には日本ブルーベリー協会よりブルーベリー栽培士の認定を受け、2014年からは同協会ブルーベリー栽培士資格認定講習会の講師を務めている。同協会会長の石川によれば、江澤の指導により「ど根性栽培」を実践している農家が日本の各地域にあるという。開発実践者の江澤が自ら指導することにより、「今度やるときは私たちもやってみよう」と思わせることにつながっており、協会がシンポジウムや講習会を開催することも「協会が推しているから」とこれからやってみようかと考えている人の背中を押すことになるという。

13) 苗木の実費負担しか求めておらず、栽培指導やコンサルティングは無料で行っているという。

14) 摘み取り園用であれば来園者が様々な実を楽しめるように10～15品種、直売所・市場へのお荷用であれば収穫時の混入を予防するために3～4品種、加工用であれば酸味のあるもの、といったもの。

15) 同書は2014年10月に第1刷発行、その後増刷を重ね2017年11月現在には第4刷まで発行されている。

そして「ど根性栽培」の普及に貢献するだけでなくブルーベリー栽培関係者に衝撃を与え意識変化を迫ったのが、江澤による書籍『ブルーベリーをつくりこなす』であった¹⁵。アメリカから導入された栽培方法を基に日本ブルーベリー協会がまとめた書籍『ブルーベリー全書』に沿ってブルーベリー栽培関係者は水とピートモスを重要視してきたのに対し、『ブルーベリーをつくりこなす』はそれを覆す内容になっているからである。石川は次のように語っている。

江澤さんは本を出していますが、相当衝撃的な本なんです。全国的に栽培者が買い求めて、従来の栽培方法との違いとか、実際に自分のところで適応できるかどうか、そんなことも考えながら読んでいたのではないかと思います。[中略]江澤さんは、こつこつとやってきたわけです。技術指導もして、実際の産地というか栽培者もいて、それを実践した人もいて、それで本が出たわけです。それは強烈なわけです。有無を言わずです。事実です。最初はみんなちょっと不安でした。でも事実を示されたから、これはもう、こんなに強いものはないから。

江澤によれば、石川は東京農工大学でアメリカ型栽培法の研究を行っていたこともあり、最初は「ど根性栽培」について全然受け付けなかったが、話をしていく中でだんだん理解してくれたという。石川は「ど根性栽培」を応援しながら、従来のアメリカ型栽培方法も引き続き実践と研究が必要と考えており、しばらくは両者が併存する形で日本型栽培方法を確立していくことが望ましいと指摘している。

江澤さんは、従来の協会の方針を降ろしてもうこれ[筆者注:「ど根性栽培」]にしろと言うのだけれども、まだ協会としての裏づけが十分ではないので、それはちょっと待ってくれと言っている。[中略]2005年に『ブルーベリー全書』を出して10年経った。10年経って江澤さんのような話が出てきたり、いろいろなところの経験もあって、日本型ブルーベリー栽培に1つの技術が加わったり、いろいろなことをしている。ただ、そういうものを集めても協会の方針となるような栽培技術とはまだならないんです。ですから、今は両方というわけではありませんが、そういうかたちでやっているんです。[中略]もう少しいろいろな技術的なことが分かってきて、新しい協会としての基本になるものを作るかもしれない。[中略]これまでのやり方も大事にしながら新しいやり方や多様なやり方を全て受け入れ、日本ならではの日本独自の栽培方法を確立する。一歩ずつね。そして、ある段階に来てそういう本ぐらいいは書けるようにな

れば、協会でそういう本を書いて、またみんなにこういうことでブルーベリー協会はやっていきたいと思いますということになるけれど、当面は今言われたようにいろいろなことが出てくるということもあるので、それを一緒にやりながらと思っているんです。

江澤にとっては『ブルーベリーを作りこなす』の出版は大きな決断であったという。1994年の日本ブルーベリー協会発足以来理事として参画し、2005年からは副会長を務めている。そのような中、協会の推奨する栽培方法とは異なる書籍を出版したのである。しかし、これを契機に日本ブルーベリー協会は変わりつつあると江澤は指摘する。石川の言葉にもそれが表れている。

協会としても、漠然とだけれども日本型ブルーベリー栽培というものを目指そうとしているんです。「ど根性栽培」に関する協会主催のシンポジウムや講習会は、ブルーベリーの普及にも非常に大きな力になっている。日本型ブルーベリー栽培が少しずつ確立されてくる。それは日本型だから、江澤さんが言うように今までのような資材を投入しなくてもいいし、新規参入する場合などは非常に取り組みやすい。ピートモス何百袋買っていくらなんて言われたら大変ですからね。それは0じゃないけど、まあまあ0に近いほどになればやはり新規の人たちも取り組みやすい。それから、もう少し増反してみようという人にとっても、それはやはり経済的に楽ですからね。

2016年、ゴルフ場「キングフィールズゴルフクラブ」(千葉県市原市)が敷地内遊休地にブルーベリーの苗木900本を定植するプロジェクトを実施した際、江澤は品種構成のプロデュースを行った。これは同クラブを経営する「磯子カンツリークラブ」の鈴木会長による、「ど根性栽培」で育てたブルーベリーを安全・安心でおいしい食材としてゴルフ場内レストランで提供したいとの依頼によるものであった。企業からこうした依頼を受けるのは大変珍しく新たな普及可能性を示す出来事だという。定植後1年が経過した2017年、苗木は「ど根性栽培」で無事に生育している。

(2) 社会的評価の高まり

2013年、日本特産農産物協会主催「地域特産物マイスター制度」においてブルーベリー栽培の新技术が評価され、全国で2番目のブルーベリーマイスターに認定されてから、江澤は次々と表彰を受けることとなる。2014年には山の斜面活用、省資材・省力の栽培法が評価され、国土緑化推進機構主催「平成26年度全国育樹活動コンクール林野庁長官賞」を

受賞した。2015年には無農薬・無化学肥料による栽培技術の確立・普及、山林の有効活用、生物多様性保全の取り組みが評価され、農林水産省「平成26年度環境保全型農業推進コンクール関東農政局長賞」を受賞した。さらに同年、森づくりの優れた技を極め他の模範となっている達人として、国土緑化推進機構「平成27年度森の名手・名人」に選定された。

江澤個人としてだけではなく、木更津市観光ブルーベリー園協議会としても次々と表彰を受けるようになった。2015年、環境に配慮したブルーベリー栽培による地域活性化を行っていることが評価され、千葉県主催「ちばコラボ大賞（千葉県知事賞）」を木更津市観光ブルーベリー園協議会・木更津市・千葉県君津農業事務所が連名で受賞した。2016年にはブルーベリー観光農園事業の推進や地域団体との連携による事業推進が評価され、農林水産省・日本農林漁業振興会共催「平成28年度豊かなむらづくり表彰事業農林水産大臣賞」を受賞した。さらに2017年には、農山漁村活性化の優良事例として農林水産省主催「ディスカバー農山漁村の宝」（第4回選定）にも選定された。

農林水産大臣賞の受賞理由・評価された点について、協議会メンバー「ブルーベリー摘み取り園のらり・くらり」代表の飯田は、日本ブルーベリー協会の会員向け会報77号の中で、次のように指摘している。

江澤会長の「ど根性栽培」の実践によって省力されたことで、各園が規模を拡大して来園者数が倍増したこと、耕作放棄地を整備して観光客を呼び込む仕掛けを作っていること、初期投資が少なく私たちのような福祉作業所も参入できたことなど、「ど根性栽培」による成果が評価されました。さらに、行政と協力してブルーベリーを市の特産品にしてきたことや、農業と福祉の連携、6次産業化を進める女性の活躍などが千葉県内における「むらづくり」の優良事例であり、農村活性化のモデルになることも評価の対象となりました。

こうした社会的評価の高まりは、松木による「ど根性栽培」普及のための戦略が功を奏した結果でもあった。松木は次のように語っている。

最初のうちは地域の中から物事を動かそうと一生懸命やっていたのですが、やはり内圧で変えていくのは難しいと感じました。結局、コンクールの受賞などの外圧で変えていく方が効率的だと分かったので、それから賞を狙う取り組みを始めたんです。個人的には権威でコロッと態度を変えるような人たちがあまり好きではないし、賞そのものには全然興味がないのですが、そうは言っても、これが一番手っ取り早いんです

久留里線沿線地域の可能性

よね。それに木更津市としても、外から人がたくさん来てお金をいっぱい落としてくれるれば、結果的にみんな稼げて税収アップにつながるわけです。こういったことを本来なら企画部や経済部の職員が率先してやるべきだと思います。

松木は、これだけ表彰されるようになるとこれまで進めにくかったものが進めやすくなってきており、いま転換点を迎えていると考えられるとも指摘している。

ゼロから1になるまでが大変で、1を5とか10に増やすのは簡単なんですよ。ゼロから1を生むのが一番重要であるにもかかわらず、それを今まで誰もやってこなかったのでしょうか。

2015年12月には木更津市のブルーベリーの更なる認知度向上とJR久留里線の活性化を目的として、JRと連携し「ブルーベリー紅葉祭り」が開催された。これを契機にJRとの連携イベントも毎年開催することが予定されている。地元喫茶店やレストランなどの飲食店でも木更津産ブルーベリーを使用したメニューを提供するところが現れてきており、協議会メンバーは木更津がブルーベリー産地であることが少しずつ認知されるようになってきていると実感しているという。

4. 考察

上記では「ど根性栽培」による無農薬ブルーベリー観光農園事業がめざす地域活性化の取り組みを、ソーシャル・イノベーションの創出と普及という枠組みで分析、検討してきた。地元木更津市に戻ってきた江澤が人口減少、高齢化、地域産業の衰退という社会的課題を認知し、東京湾アクアライン建設がもたらす農業への影響、今後の農業のあり方について強い問題意識をもったことがソーシャル・イノベーションの創出プロセスのフェーズⅠ（社会的課題の認知）にあたるであろう。そしてブルーベリーと出会い、従来型栽培方法による産地化の失敗を経て「ど根性栽培」を開発し、専業農家として観光農園エザワフルーツランドを設立したこと、「ど根性栽培」を採用した農園とともに木更津市観光ブルーベリー園協議会を立ち上げ、日本一の応援団から様々なサポートを得て無農薬ブルーベリー観光農園事業を展開しはじめたこと（表3における準備期、創業期、事業開発期）が、ソーシャル・イノベーションの創出プロセスのフェーズⅡ（ソーシャルビジネスの開発）にあたるであろう。木更津市観光ブルーベリー園協議会の観光入込客数がほぼ倍増して

いった時期、日本ブルーベリー協会よりブルーベリー栽培士に認定され、より多くの農園の利益をうむことを目的として「ど根性栽培」の栽培指導を行うようになったこと（表3における発展期）が、ソーシャル・イノベーションの普及プロセスのフェーズⅢ（市場社会からの支持）にあたるであろう。社会的評価が高まり様々な賞を受賞するようになったことや書籍『ブルーベリーをつくりこなす』の発行により、「ど根性栽培」を採用する農家数が増え栽培習慣に変革をおこしたことが、ブルーベリー栽培関係者に意識変化がうまれたこと（表3における普及期）が、ソーシャル・イノベーションの普及プロセスのフェーズⅣ（ソーシャル・イノベーションの普及）にあたるであろう。この一連のプロセスは、エザワフルーツランドを中心とした多様なステイクホルダー間の協働によって進められたソーシャルビジネスであったことが明らかとなった。

これを踏まえて、久留里線沿線地域の活性化に資するブルーベリー産業の可能性について考察する。それはすなわち今後さらに経済的・社会的成果をうみつつ、既存の諸制度を変革していくことであろう。松木は日本ブルーベリー協会20周年記念誌（2014）への寄稿「これからのブルーベリー産業の向かうべき方向性について」の中で、ブルーベリー産業が伸びる可能性のある手法として次の5点を指摘している：①市場出荷だけに依存せず、観光農園経営や加工品開発などの比重を増やすこと、②できる限り農薬や化学肥料を使用しない栽培を心がけ、付加価値をつけること、③田畑だけではなく、山林も有効活用しながら魅力的な農園経営を行うこと、④加工品パッケージや観光農園チラシの製作をクリエイターと協働して行うこと、⑤本に書いてあることを鵜呑みにせず、自分で実際に検証する習慣をつけること。

いま協議会ではこの松木の指摘に沿う形で、6次産業化をさらに推進していくべく、無農薬で安全・安心な商品であることを大切にしながら、生産者の強みを活かし木更津産ブルーベリー100%に近い新たな加工商品開発を進めている。その品質の高さをもって高級ブランド化を図り、世界一の値段で販売することを目指している。そのためデザイナーやコンサルタントといった新たなステイクホルダーを巻き込み、商品のパッケージなどをより洗練されたものに改善していく取り組みが進行中である。農林水産大臣賞など様々な賞を受賞したことは販売量増大に弾みがつくことにもなるが生産量はまだまだ少ないため、中間の農園を増やし（とくに若い世代の参画を増やし）、休耕地を活用し、「ど根性栽培」で収穫量を増やしていこうとしている。また観光農園としてのグレードを上げるため、園地および周辺に花の咲く木を植えるといった景観づくりも進行中である。並行して、台湾やタイ、マレーシア、インドネシアなどアジア近隣諸国にもアプローチし、2020年のオリンピックを見据えて観光農園への来園者増を図っている。

久留里線沿線地域の可能性

こうした取り組みにより、各園が十分な利益を継続的に確保できるようになれば、さらなる農地拡大や環境整備、雇用確保につながり、ブルーベリー産業としての持続可能性が増すと考えられる。それは久留里線沿線地域への観光客数増加および就業人口増加という形で活性化に資すると期待される。そして木更津地域発の「ど根性栽培」が様々な地域に普及し、従来型栽培方法を用いるブルーベリー栽培関係者との研究交流が進むことにより、日本型ブルーベリーの栽培方法確立に資することになろう。協議会および日本ブルーベリー協会は今後、「ど根性栽培」に関する研究をともに進める研究者との協力関係も構築・拡大することによって、日本におけるブルーベリー栽培の習慣を変革していくこともできるだろう。

インタビュー

日 時	対 象 者	所属（インタビュー実施当時）	場 所
2015年5月1日 13:30～14:30	江澤貞雄	エザワフルーツランド代表	エザワフルーツランド
	松木貴史	木更津市経済部農林水産課主事	
2016年5月28日 17:30～20:15	江澤貞雄	エザワフルーツランド代表	イトーピア浜離宮ロビー、 居酒屋いるはにほへと
2016年6月29日 18:00～20:00	松木貴史	木更津市市民部市民活動支援課主任主事	木更津駅前喫茶店ラビン
2016年8月7日 10:30～12:00	江澤貞雄	エザワフルーツランド代表	エザワフルーツランド
	松木貴史	木更津市市民部市民活動支援課主任主事	
2016年8月24日	石川駿二	一般社団法人日本ブルーベリー協会会長	日本ブルーベリー協会事務所
2017年3月18日 13:00～15:30	飯田喜代子	NPO 法人一粒舎/ ブルーベリー摘み取り園のらり・くらり代表	ブルーベリー摘み取り園 のらり・くらり
2017年3月20日 13:00～20:00	江澤貞雄	エザワフルーツランド代表	エザワフルーツランド
	松木貴史	木更津市市民部市民活動支援課主任主事	
2017年6月10日 13:00～17:00	江澤貞雄	エザワフルーツランド代表	エザワフルーツランド
	松木貴史	木更津市市民部市民活動支援課主任主事	
2017年6月25日 9:00～12:00	本居聡子	千葉県君津農業事務所主任上席普及指導員	星乃珈琲おゆみ野店

謝辞

本事例研究にあたり、江澤貞雄氏（エザワフルーツランド）、松木貴史氏（木更津市）、石川駿二氏（日本ブルーベリー協会）、飯田喜代子氏（ブルーベリーつみとり園のらり・くらり）、本居聡子氏（千葉県君津農業事務所）をはじめとする多くの方々にご助力いただいた。記して感謝の意を表したい。

ウェブサイト

エザワフルーツランド <http://www.ezawaf.com/>

木更津市観光ブルーベリー園協議会 <https://kisarazu-blueberry.jimdo.com/>

木更津市 <http://www.city.kisarazu.lg.jp/>

日本ブルーベリー協会 <http://japanblueberry.com/>

日本造園組合連合会 <http://www.jflc.or.jp/>

新聞記事

日本農業新聞2016年9月26日「悪条件下で花開いた「ど根性栽培」ノウハウを多くの仲間に」

参考資料

江澤貞雄(2002)「ブルーベリーの育て方」(月刊『園芸通信』での連載記事を再構成した冊子)

江澤貞雄(2016)「お悩み相談室」『林業新知識』2016年9月号, 11月号, 12月号。

木更津市観光ブルーベリー園協議会(2015年7月21日)プレスリリース「「ブルーベリーフェスタ!2015」を開催します!」

木更津市観光ブルーベリー園協議会(2015年11月26日)プレスリリース「ブルーベリーの葉が真っ赤に変わる?冬のブルーベリー紅葉祭り 初の開催!」

木更津市観光ブルーベリー園協議会(2016年3月23日)プレスリリース「さらなる地域ブランド化を後押しする新しいロゴマークがついに登場!」

木更津市経済部農林水産課(2014年8月29日)木更津市報道発表資料「江澤貞雄氏が全国育樹活動コンクールで林野庁長官賞を受賞」

木更津市経済部農林水産課(2015年2月25日)木更津市報道発表資料「江澤貞雄氏が環境保全型農業推進コンクールで関東農政局長賞を受賞」

木更津市経済部農林水産課(2015年2月25日)平成26年度環境保全型農業推進コンクール応募資料

木更津市経済部農林水産課(2015年2月25日)平成26年度環境保全型農業推進コンクール事例発表会での報告資料

木更津市経済部農林水産課(2015年10月19日)プレスリリース「江澤貞雄氏が「森の名手・名人」に選定されました」

木更津市経済部農林水産課(2015年11月26日)プレスリリース「木更津市観光ブルーベリー園協議会が「ちばコラボ大賞」を受賞!」

芹澤比呂也(2010)「農協職員から専業農家へ50歳で観光農園経営を目指す」『農業経営者』

2010年9月号, pp. 12-17

日本ブルーベリー協会(2001年9月29日)『ブルーベリー導入 五十年の歩み』.

日本ブルーベリー協会会報「ブルーベリーニュース」No.77

日本ブルーベリー協会(2014年11月)『ブルーベリーニュース:日本ブルーベリー協会設立
20周年記念合併号』

日本ブルーベリー協会(2016年10月22日)『第23回ブルーベリーシンポジウム:日本型ブ
ルーベリー作りをめざして』予稿集

松木貴史(2012年5月)「“ブルーベリーツーリズム”による地域ブランド化戦略」(市町
村アカデミー修了レポートとして)

松木貴史(2014年11月1日)「これからのブルーベリー産業の向かうべき方向について」
(日本ブルーベリー協会20周年記念誌)

松木貴史(2015年4月23日)「木更津のこれからの農業について」(ロータリークラブでの
報告).

参考文献

江澤貞雄(1984)「農業の変化と対応」『房総半島午前四時』千葉地域科学研究所, pp.86-
90。

江澤貞雄(2014)『ブルーベリーをつくりこなす—高糖度, 大粒多収』農文協。

江澤貞雄(2017)「ブルーベリーでおもてなし—木更津からの報告」梅原彰編『農業は生き
方です—ちば発, 楽農主義宣言』さざなみ会, pp.86-88。

経済産業省(2008)『ソーシャルビジネス研究会報告書』[http://www.meti.go.jp/policy/
local_economy/sbcb/sbkenkyukai/sbkenkyukaihoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/sbkenkyukai/sbkenkyukaihoukokusho.pdf)(2015年11月4日確認)

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法:原理・方法・実践』新曜社。

櫻井厚(2011)『インタビューの社会学:ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

谷本寛治, 大室悦賀, 大平修司, 土肥将敦, 古村公久(2013)『ソーシャル・イノベーション
の創出と普及』NTT出版。

谷本寛治(2013)「序論:持続可能な発展とイノベーション」企業と社会フォーラム編『持
続可能な発展とイノベーション』千倉書房, pp.3-14。

谷本寛治編著(2015)『ソーシャル・ビジネス・ケース—少子高齢化時代のソーシャル・イ
ノベーション』中央経済社。

野中郁次郎, 廣瀬文乃, 平田透(2014)『実践ソーシャル・イノベーション—知を価値に変
えたコミュニティ・企業・NPO』千倉書房。